

公爵様と仲良くなるだけの簡単なお仕事

登場人物紹介

フェーミナ
(二つ名『鉄の淑女』)

隠密機動局の一員。
構成員の中では
一番の実力者。

ラピス
(二つ名『漆黒の石』)

隠密機動局の一員。
ガタイが良いとの
噂がある。

ジョクラトル
(二つ名『虹の道化師』)

隠密機動局の一員で、
変装が得意。
軽薄そうに見える。

マリリン

公爵家の女中頭。
サバサバした性格で
毒舌だが、いざという時に
最も頼りになる存在。

ラウルス
(二つ名『勝利を掴む者』)

隠密機動局の一員。
男装の麗人で、ユードラを
気に入っている。

フロース

レグルスの妹。
お姫様のように美しいが、
齒に衣着せぬ物言いで
兄から恐れられている。

レグルス

公爵家の嫡男。
世界中の女性に迫られそうな
くらい見目麗しいが
極度の口下手&人見知り。
謎が多く、早朝に出かけて
夜も遅くに帰宅する毎日。

ユードラ

貧乏子爵家に生まれ、
22歳になるまで
労働に身を捧げてきた。
そんな中、ひょんなことから
公爵家に仕えることに！
けれど旦那様となかなか
打ち解けられず、
奔走中。

公爵様、どうしてそうなった!?

我がプリマロロ子爵家は、笑っちゃうくらいの貧乏貴族である。

日々の生活に追われ、家計は常に火の車。地を這うように暮らしているが、家族は皆明るい性格をしている。

私、ユードラ・プリマロロにも子爵家の能天気な遺伝子はしっかりと刻まれているらしい。二十二と貴族女性としては大きく嫁ぎ遅れてしまった年齢になっても、さほど気にはしていなかった。

家が貧乏だということで、幼い頃より労働少女と化していた私。

とは言っても、王宮での軽作業なのでそこまで重労働ではない。主な仕事は掃除や洗濯などの下働き。

働き始めて五年ほど経った頃、侍女にならないかと誘われたこともあったが、王族と直接関わるお仕事は基本的に私服を着るのだと聞き、お断りさせてもらった。上流階級の方々に交ざって働けるような上等な服など持っていないという悲しい理由で。

そして勤労十年目となれば、銀器保管庫の鍵係や、陶磁器の管理など、特別な役割を与えられる。

この前も料理長に「最近貫禄が出てきたな」と言われてしまった。まったく嬉しくない。貫禄ってなんだよ、若い娘に使う言葉じゃないよ、と思いつながら鏡を覗き込めば、人生に疲れた主婦のような顔をした女が映っていて、若干落ち込んだ。

ここ最近、ちよつと働き過ぎて、一気に老け込んだのかもしれない。過酷な労働は若さをも吸い取ってしまうようだ。

今まで家族の事を思って頑張ってきた。が、このまま自分は働き詰めの人生で何も楽しいことを知らずに、貫禄だけ無駄についた状態で人生の終わりを迎えるのでは、と危機感を覚える。

ふと、目の前にあった花に視線を奪われた。洗面台の上にある花瓶の中では、萎れかけた花が日の当たらない場所であつたりとしている。花瓶を持ち上げれば、中の水は空だった。

誰にも愛でられずに静かに萎れていく花。思わず自分の姿と重ね合わせてしまい、ぞつとする。とつさに、このままではいけないと思つた。大恋愛をしたいとか、そんなことは今さら望まない。

ただせめて、キラキラしたお綺麗な顔の王子様とか、生真面目で融通のきかない騎士様とかを、本陰から愛でるくらいなら許されるだろう。

思い立ったら即行動。直属の上司に「目の保養をしつつ働きたい」と相談したところ、あつさり新たな仕事の話が舞い込んできた。

「ユードラ・プリマロロ。あなたがそのように言ってくれて助かったわ」

「はい？」

王宮で下働きの使用人を束ねている上司は、心底安心した表情で言つた。どうしてそんな顔をし

ているのか不安になつたので、手渡された就労条件を読み直す。

- ・高貴な方にお仕えするお仕事です。
- ・主な仕事は軽いお世話など。
- ・秘密厳守。

王宮で働く時にも似たような条件が示された。別に就労条件でおかしなところはない。

念のため、突っ込んだ話を聞いてみる。

「あの、これって、どなたかにお仕えするお仕事なんですよね？」

「ええ、そうよ」

「もつと詳しく教えていただけませんか？」

「それは無理、こちらにも守秘義務があるから。正式に雇用契約が結ばれたらお話しできることもあるけれど」

なんだか怪しい。

二十二にもなれば、「支給されたお仕着せで王子様の前に出るのは恥ずかしい！」といった初心な乙女心はなくなり、「お城から支給されているんだからこれが正装だろう！」と胸を張れるくらいには図々しくもなる。そんな私の中にある使用人としての勘が、これはお断りすべき案件ではないかと告げている。

「あの、すみません、せっかくのお話ですが、やっぱり」

「拒否権はないわ!」

いきなり上司に手首を掴まれ、無理矢理ペンを握らされた状態で、雇用契約書への署名を強要されそうになる。

「も、申し訳ありませんでした! な、生意気にも、男前を眺めながら仕事をしたいだなんて言うて……! ごめんなさい、許してください……!」

「駄目よ。これ以上、先方を待たせるわけにもいかないし。観念なさい、親切なお嬢さん」

「ひええええ」
私は最終的に羽交い締め^{はが}にされ、親指の腹にインクを塗りたくられて契約書に母印^{ぼいん}を捺^おす羽目となった。

「署名はこちらできっちり書いておくから」

「それ、偽造^{ぎざう}じゃないですか!!」

上司は明後日^{あさって}の方向を見ながら、畳^{たた}んだ契約書を自身の上着の内ポケットに捻^ねじ込んだ。

悪いようにはしないと強く主張する上司。条件は驚きの厚待遇で、衣食住は保証。さらには働きに応じて別報酬^{べつほうしゅう}もあるらしい。

「そ、それで、お仕える方とは?」

「——とある公爵様よ」

「え、公爵^{きやく}ってユースティティア家^けしか」

「とある公爵様!!」

「……は、はい。とある公爵様で大丈夫です」

国内に公爵家は一つしかなかったが、上司には『とある公爵様』で通せと言われる。

しかも、私がお仕えるお方の呼び方は『局長』でいいと指示された。どこの局^{きょく}の長^{ちやう}だと思っただが、これも秘密事項^{ひみつじきぎょう}のようで詳細は謎であった。

それにしても、何故^{なぜ}このような名誉あるお仕事の話が私のもとに舞い込んだのか——そういえば、先ほど上司は「親切なお嬢さん」と口^{くち}にしていた。覚えのあるその単語に、私はある日の出来事を思い出す。

——遡^{さかのぼ}ること一ヶ月前。休憩時間、王宮の庭園を散歩している途中で、老齡のご婦人を見かけた。服装^{ふくそう}からして上流階級の女性だとわかる。

その場に蹲^{すくま}っていたので、慌てて駆け寄って声をかけたところ、供も付けずに出かけ、運悪く具合が悪くなったらしい。

力^{ちから}があまり余っていた私はご婦人をおんぶして医務室まで連れていき、あとは頼んだと看護師に託^{たく}そうとした。が、名前を教えてくださいと、私を引き止めるご婦人。私は、「名乗るほどの者ではないので」と言ってその場を去った。この台詞^{せりふ}、一度言ってみたかったのだ。

驚いたのがそのあとの話。

自宅に、ある荷物が届いた。それは小箱で、宛名には「親切なお嬢さんへ」、差出人には「庭で

倒れていた老婆より」とあった。あの時のご婦人からお礼が届いたのだと、私は大喜びで包装を剥ぐ。チョコレートか、それともクッキーか。心躍らせながら箱を開けば、中にあったのは――青い宝石がついた首飾りだった。キラキラと輝く石が眩しくて、ゆっくりと目を閉じる。

一瞬思考が停止したが、すぐに我に返って箱を開け、家にあつた包装紙で包み直して返送した。差出人の名前と共に書かれていたのは、王宮の住所だった。

……もしかして、今回の件にはあの時のご婦人が関わっているとか？

仕事を紹介してくれた人についても上司に聞いてみたけれど、当然ながら答えは返ってこない。そして私は、終始混乱しつつも、新しい仕事を受けることになったのだった。



公爵家には翌日から勤めることとなった。きちんと引き継ぎをしてから新しい職に就きたいと言ったが、その意見は綺麗に無視される。当分の間、私の抜けた穴は上司がどうにかするらしい。高貴な方に仕えるのは初めてなので粗相をするかもしれない、そうならば不敬罪に当たる！と最後の足掻きとばかりに訴えたものの、公爵様は王位継承権を放棄しているので大丈夫だと笑顔で送り出されてしまった。

ユースティティア家といえば、王族と血縁関係にある大貴族だ。当主である公爵様は国王様の

甥子で、年齢は三十前後。去年開催された御前武道大会では、準優勝という素晴らしい結果を残していた。大会では仮面を付けるという謎の扮装で参加していて、その外見についてはあやふやな情報しかない。とは言っても、王族の皆様は揃って美形。公爵様もさぞ美しいに違いない。毎日心が洗われる思いができるのではと、開き直ることにした。

こうして迎えた公爵家への初出勤日。私は緊張でガチガチになっていた。

大きなお屋敷に到着し、新しい仕事着だと言って手渡されたのは、貴族のご令嬢が着ているようなリボン付きのブラウスに長いスカート。それ以外にも、上等な服が何着も渡される。

それから、どういうわけか公爵家の侍女さんから綺麗に化粧をしてもらい、あまり艶のない髪の毛にも良い香りのする何かを揉み込まれた。

ずっと自分の髪は黄土色だと思っていたけれど、鏡を覗けば綺麗な金髪に見える。今日の私は若々しい娘のようだ。昨日見た、生活に疲れた主婦と同じ人物とは思えない。いつもは曇り空みたに見える目の色も、しだいに白金のように輝いてくる。

女中頭に準備はいいかと訊ねられ、浮かれ気分だった私は気を引き締めた。

「旦那様との対峙でお困りになられたら、こちらを読まれてください」

そう言って手渡された、一冊の本。表紙には真っ赤な文字で極秘と書かれてある。何かと聞けば、彼女も内容を把握していないらしい。

私はその本を手に、女中頭の先導で公爵様の部屋に向かった。

部屋に入る時は、声かけやノックはしなくてもいいと言う。公爵様がびつくりするからだ。

……なんだろう。お世話をするのは成人済みの公爵様ではなくて、人見知り盛りの子猫ちゃんなのだろうか。接触は慎重にと言われたので、赤子の世話をするような優しさで接しますと誓った。

「――では、私はここで」

「え、紹介とかしてくれるのでは？」

「いえ、頼まれたのは部屋の前に案内するところまでです」

「そ、そんな!!」

眼鏡をかけた女中頭のお姉さんは、私を公爵様の部屋の前に置き去りにしてしまった。一瞬にして額に汗が浮かぶ。だが、ここで呆けている場合ではない。こうしている間にもお給料は発生しているのだ。

意を決し、『たのもー!!』と心の中で叫びながら、勢いよく扉を開く。

部屋の中には、当たり前だが執務中の公爵様の姿があった。驚いた顔をこちらに向けている。

私が来ることに對して何も情報が入っていなかったのか、公爵様はひたすら瞠目するばかり。

気まずかったので「あ、どうも」と声をかければ、公爵様はささっと机の下にしゃがみ込んだ。

机の下に何かを落としたのかと思いきや、一向に顔を出さない。さっそく困ってしまい、先ほど渡された本を開く。

なんと、そこには耳寄りな情報が書かれていた。『公爵様は極度の人見知りである』と。

うんうん、把握、人見知りだから隠れたのね。……でもこれ、この状態からどうすればいいの？

疑問に思っただけでページを捲ったが、以降は白紙で、公爵様の攻略法などは書かれていなかった。

依然として、公爵様は机の下に潜ったまま出てこない。

罅が明かないと机の下を覗き込んだら、公爵様が一瞬にして涙目になったので、見なかった振りをすることに。

……なんというか、公爵様は大変な変わり者であった。

公爵様は、お茶を持っていつでも食事を運んでも、私が近づけば机の下に籠城してしまう。人見

知りをする時期の幼子か、と思っただけ、もしかしたら女性関係で心に傷があるのかもしれない。

なんと言ってもあの美貌！ サラサラとした銀の髪に切れ長の目。緑色の瞳はまるで宝石のよう

長い前髪のせいで右目が隠れており、もったいない。また体型も美しく、きつと手足も長いと思わ

れるが、しゃがみ込んで膝を抱える姿しか見たことがない。世界中の女性に「素敵、抱いて！」と

迫られたせいで女性恐怖症になったのだろうか。だが、それならば何故女である私を採用した？

よくわからない。

その日は、公爵様の飲み物や食べ物や運ぶだけの簡単なお仕事になってしまった。

夜、女中頭さんに案内されたのは、私が滞在させていただくお部屋。だが、どうみても豪華絢爛な

客間にしか見えない。思わず清掃をしたらいいのかと聞いてみれば、ここは私の部屋だと言われた。

……なんだろう、この破格の待遇は。

13 公爵様と仲良くなるだけの簡単なお仕事

私を部屋に通してさっさと帰ろうとする女中頭さんのエプロンを掴み、引き止める。振り返った彼女の顔はあまり愉快なものではなく、ぎゅっと眉間に皺が寄せられていた。きっと忙しいのだろう。悪いと思って早口でまくし立てるように質問をする。この仕事は退職者が続出しているのかと答えは否だった。この仕事に就くのは私が初めてらしい。ますますわからなくなった。辞める人が多いから待遇を良くしているわけではないらしい。

ちなみに、使用人は全員このような部屋で生活しているのかと聞けば、そんなわけないと呆れたように言われてしまった。話が終わると、女中頭はこちらに一礼をして部屋から出ていく。

その後、運ばれてきた夕食は、先ほど公爵様に持っていた品目と同じものだった。
あれ、これ、おかしくない？



翌日も、侍女が来て身支度を手伝ってくれた。私はお礼を言って部屋を出る。

相変わらず業務については何も説明されない。ただ、掃除、洗濯、炊事などは女中がするのでなくてもいいということだった。そうすると、残るのはお茶を運んだり、食事を運んだりする簡単な仕事だけ。

けれど、そんな美味しい話あるわけがない。大変な落とし穴があるのでは、と盛大に疑っている。

本日の公爵様は、寝室にも執務室にも私室にも書斎にもいなかった。念のためお風呂も覗いたが、中は空っぽ。近くを通りかかった執事のオジサマに行方を聞けば、恐らく仕事に向かったとのこと。使用人に見つからないようにこっそり出かけるので、誰も行動を把握していないらしい。

そんな会話をしているうちに、ふと気付く。公爵様は朝食を召し上がっていないのではないかと。だが執事は、職場で食べているようなので大丈夫だと教えてくれた。

私もその謎の職場についていかなきゃいけないのでは？ と聞いたところ、必要ないという。公爵様についてくるように言われたら、いけばいいと。

ならば、今日は何をすればいいのかと質問。好きなようにお過ごしくださいと言われてしまった。
—— やっぱりおかしい。ここの仕事、楽過ぎる。

何かとんでもない事情があるに違いないが、いくら考えても、私の貧相な頭では思いつかなかった。

ふらふら廊下を歩いていると、前方から誰かがやってきたので、邪魔にならないよう端に避ける。失礼にならない程度にチラ見をすれば、ドレスを纏ったお方だった。お屋敷の住人、あるいはお客様かもしれない。頭を下げて通過するのを待つ。

ところが、カツカツという規則的な足音は何故か私の前で止まった。

「ねえ、あなた」

聞こえたのは若い女性の声。頭を上げると言われてその通りにすると、目の前にいたのは――

「お、お姫様！」

「はあ？」

美しい銀色の髪はきつちりと一つに結い上げられ、翠玉色エメラルドの双眸そうぼうは高貴な輝きを放っている。麗しい容姿に目が眩くらみそうになった。纏まとっている薄紅色うすべにのドレスは、決して派手なものではない。ただ品のある意匠デザインで、彼女のためだけに存在しているように見える。

絵本に出てきそうな完璧なお姫様の登場に、鼓動が高まる。そう、私はこんなお方にお仕えしたかったのだ。

「そろそろ見飽きたかしら？」

凜りんとした声を聞いて、ハツとする。失礼なことにはしばらくの間、見入っていたようだ。

「も、申し訳ありません。あまりにもお綺麗だったので、つい」

「あら、そう」

褒め言葉は聞き飽きているのかもしれない。私の言葉はさっと切り捨てられた。

「それより、あなたがお兄様の？」

お兄様——？　そうか、このお方は公爵様の妹君！　女中頭のお姉さんに聞いた話では、確か、名前はフロース様だったような。

「ねえ、名前はなんて言うの？」

「ユードラ・プリマロロと申します」

他にも役職とか言わなければならないが、ふわっとした立場なのでなんと断言していいのかわから

ず、ただ頭を下げた。再び顔を上げると言われ、お姫様と目線を合わせる。フロース様は眉間に皺しを寄せながら、こちらを注視していた。値踏みするように見つめられ、額に汗が浮かんでくる。一体なんの用なのかと聞きたかったが、喉のどまで出かかっていた言葉がどうしても出てこない。もしや、これが王族の血縁者たる威圧感なのか。

その時、フロース様はぼつりと呟つぶやいた。

「見事なまでに平々凡々きわめてふつうだわ」

私を示す言葉、平々凡々。その通りである。

「でも、このくらい薄い人のほうがいいのかもしれないわね」

使用人に個性は不要、とおっしゃりたいのだろうか。こちらも、その通りだとは思うが。

それからフロース様は「ごきげんよう」と言って立ち去った。優雅な後ろ姿を見送りながら、私は完璧なお姫様を改めてうつと眺めてしまった。

仕事がないというのは大変辛い。一日中部屋で待機と言われても困ってしまう。

公爵家より用意された部屋には、本や刺繍道具しゅうどうぐ、楽器にお菓子、軽食とありとあらゆるものがある。けれど、どれも手を付けたらいけない気がして放置だ。

王宮勤めをしていた頃、休日に何をしていいかと言えば、ひたすら睡眠むねを貪るだけだった。それだけ疲れていたのだろう。

だが、今日は休日じゃない。賃金が発生している以上、だらだら過ごすわけにもいかなかった。

窓の外を見れば庭師たちがせつせと働いている。溜息を吐くと、綺麗に磨かれた窓が曇った。

——仕事が欲しい。けれど、お仕えすべき相手は仕事に出かけていて不在。

まるで要らない子扱いをされているようで悲しくなる。

二十二年間の人生を振り返ってみると、労働を除けば空っぽな私がいた。お掃除だったらそれなりに自信があるのに、任されたのは人見知り公爵様のお世話係。

とりあえず、公爵様の行動を把握しなければならぬ。

けれど、一体どうすればいいものか。

まるで密偵のように誰にも見つからずに出かけていく公爵様の行動を追うことは、果たして可能なのか。長年公爵家に仕える執事さえも知らないというのに。

だが、窓の外に答えはあった。公爵家の広大な敷地を颯爽と駆ける馬。

公爵様は馬を使って移動しているはず。厩舎で待機していれば、公爵様に必ず会えるわけだ。そうと気付いた私は部屋にあった焼き菓子やさつと布に包み、外に出る。そして庭師に厩舎の場所を聞き、公爵様の帰りを待つことにした。

公爵様が帰ってきたのは、日も沈みきった時間帯だった。

それまでの間、馬の世話をする人たちに、私は迷惑をかけてしまったらしい。彼らは温かい飲み物を持って来てくれたり、夜は冷えるからと肩掛けを貸してくれたりしたのだ。

夜も深まれば若干心細くもなる。暗くなった厩舎周辺は、何か恐ろしいものが出そうな雰囲気にな

なっていた。

もしかしたら今日は帰らないのでは？ と不安になりかけた時、蹄鉄が地面を叩くパカパカという音が聞こえた。

茸毛のお馬さんに跨ってご帰宅をされた公爵様。思わず小さな声で「白馬の王子様か！」と呟いてしまう。

厩舎の近くの茂みにいた私に、公爵様はいち早く気が付いたようだ。辺りが暗いので表情はうかがえない。恐らく視線が交わっているであろう状態のまま、沈黙が続く。この場の雰囲気に合わせておとぎ話に出てくるお化けのように『恨めしや』とでも言ったほうが良かったか。

公爵様が軽く咳き込んだので、私は我に返った。

「お、お帰りなさいませ」

馬から降りた公爵様はかすかに頷くような素振りを見せ、早足で厩舎の中へと入っていく。私はあとを追った。厩舎の明かりのおかげで、公爵様のびっくり顔が見えた。明らかに引いている。辺りをキョロキョロ見回しているが、残念ながら隠れる場所はない。

「お風呂になさいますか？ お食事になさいますか？ それとも——」

おっと、これは庶民の奥さんが旦那さんに聞く言葉。公爵様相手にとんでもないことを質問しうになった。

そんな中、私が一瞬目を離れた隙に公爵様は走って逃げ出す。

——こいつ、逃がすものか！

私は公爵様を追いかける形で厩舎を出る。突然、全力疾走の追いかけてが始まったが、公爵様は予想以上に足が速く、残念なことに途中で見失ってしまう。こうして悔しい気持ちのまま、私はお屋敷に帰ることになった。



公爵様にお仕えるようになって数日が経つが、状況は相変わらずなまま。運んだお茶や食事は私がいなくなるまで手を付けないし、こちらをまともに見ようともしない。

しかしさらに数日も経つと、人として不可解な公爵様の行動にも慣れてしまった。

そんな私の毎日の仕事は、朝早くに厩舎へ行き、朝食と昼食を詰めた包みを馬の荷鞍に載せて、やって来た公爵様に挨拶をして見送ること。時間は日の出前。当然、厨房の方々はいないので私の残念手作り弁当となる。料理に自信があるわけではなかったが、公爵家にある食材はどれも素晴らしい。料理の腕など関係なしに、美味しいものが出来る。

引き攣った表情で出かけていく公爵様の見送りが終われば、しばらくの間お休みをさせていただく。ここで寝ておかないと体が保たない。お昼からは、翌日の弁当の仕込みをしたり、公爵様の部屋に飾る花を庭にもらいに行ったり、公爵様の情報収集をしたり。

ちなみに公爵様の情報収集は、いまいち成果が出ていない。彼の御方は誰に対しても『鉄壁の人見知り』で、素晴らしく平等な態度を取っている。古くからお仕えしている使用人が幼少時からこ

のような性格だったと言うので、暗い過去とかまったくなって、そういう困った人なのだろう。

しかしながら、私が近寄るたびに怯える公爵様を見てると、可哀想になってくる。私ほど害のない人間はいないというのに。

どうすれば快適に過ごしてもらえるのかと悩んでいたところ、厩舎で働く方々から耳寄りの情報を入手した。『旦那様は愛馬を大変可愛がられている』らしい。

なんでも、公爵様は毎日移動に使っているお馬さんをとて大切にしており、休日は一日中厩舎にいてお世話をすることもあるのだとか。それを聞いた私の行動は早かった。部屋に籠もり、あるものの製作に取りかかる。

そして、しばらくしたあと――

厩舎の方々にもお褒めの言葉をいただいた『公爵様の愛馬の被り物』。私はそれを被っていつものように待機していた。ちよつと空気が薄くて息がしにくいという難点を除けば、表情を気にしなくていい分、意外に楽というもの。この姿ならば、公爵様も私を怖がらないだろう。

厩舎勤務の皆には、馬の被り物のままで辛くないか心配された。大丈夫、全力疾走だってできますよと走ったら、かなり息苦しくなった。これは改良の余地あり。一旦お屋敷に帰り、空気穴を増やす作業に取りかかった。

夕方、私は馬の被り物を装着して公爵様の帰りを待つ。今日の私は馬も同然。なので、厩舎の入り口で堂々と待機させていただくことにした。公爵様のご帰宅は今日も遅い時間だった。

「お帰りなさいませ！」

薄明かりの状態によく見えなかったが、ザザッと素早く後ずさる音が聞こえた。そしていつもより早足で馬房へと歩いていく公爵様。普段と違う馬面な私を警戒しているのだろうか。

私も、明かりのついた厩舎の中へ入る。しっかりと姿を見れば安心してくれるはずだと思いがら。

「公爵様」

声をかけたところ、公爵様のハッと息を呑む様子がわかった。そうです、私はあなたの愛馬です、と言おうと思ったのに、いつもと同じように逃げられてしまう。私はスカートを翻しつつ、「待ってください!!」と追いかける。

——作戦は大失敗。どうしてこうなった。

馬の被り物を改良したおかげで全力疾走しても息苦しくならなかったのは、唯一良かった点だろう。



公爵様と私の不毛な関係も二ヶ月目に突入した。初めて支給されたお給金に目が飛び出るような思いをして、自分の給料泥棒っぷりに落ち込んでしまう。

使用人の方々に私はこれでいいのかと聞いたところ、どの人からも「よくやっている」と言われた。そういう優しい言葉をかけてほしいわけではないのに。

気を許してくれたら公爵様も私を職場に同行させて仕事をくれるようになるのではないかと思います。さまざまな作戦に出てみたが、どれも結果はふるわず……頭の中は公爵様でいっぱいになり、どうすれば仲良くなれるものかと考える日々を過ごしていた。

もともと、公爵様も私を無視しているわけではない。「行つてらっしゃいませ」や「お帰りなさいませ」などと声をかければ、かすかに頷くような仕草も見せてくれる。ただ、机の下など隠れる場所がない時限定の仕草だが。

——悩んだ時は相談だ。私は休憩所で優雅にお茶を啜っていた女中頭に声をかけた。

「あの、少しいいですか」

「なんででしょうか？」

私は休憩中なのに、と言わんばかりの冷たい声が返ってきた。けれど、図々しい私は隣に座って口を開く。

「相談なのですが、その、今、とても気になる方がいます」

なんとなく、公爵様の名誉(?)のためにも詳細は伏せて話を始める。

無口で恥ずかしがり屋の方と仲良くなるにはどうすればいいのか。そう訊ねたところ、女中頭からは「諦めたらどうか」という、なんともあつさりした反応が返ってきた。だが、給金をもらっている以上、諦めるという選択をするわけにはいかない。

「私、初めてなんです、こんなじれったいような、強く焦がれるような、一日中その人のことしか頭にないような、モヤモヤとした感情を抱くのは」

「それは、それは。おめでとうございます」

自分の頭の中がおめでたいことなど、とつくの昔に気付いている。なので、何を言われても平気だった。

それよりも、どんどん一人で盛り上がっていつてしまう。

「――荒ぶる思いを伝えたいのに、言葉ではうまく伝わらなくて！」

「だったら紙に書いて伝えたらどうでしょうか？」

「それだ!!」

どうして今まで思いつかなかったのか。私は女中頭にお礼を言い、休憩所を飛び出す。

ちなみに女中頭の名前は、マリリンさんと言う。とても可愛らしい名前なのに、絶対に名前前で呼ぶなど言われてしまった。とても残念。眼鏡が似合う知的美人だ。彼女のような人こそ、貫禄ある使用人だと思っている。

私は部屋に戻り、引き出しの中から筆記用具と便箋を取り出した。そして勢いのまま筆を執る。走り出した万年筆は止まらない。

気が付けば、五枚にもわたる感動長編な手紙となっていた。誤字脱字がないか読み返してみる。うん、長くて読み返す気が起きない。

手紙はなるべく簡潔に。昔、父から習ったことを思い出す。新しい便箋に、自分の自己紹介と、毎日の弁当に不満はないかということだけを書き記して封をした。

だが、ここで、大変なことに気が付く。公爵様のお名前を知らなかったということに。

今さら『公爵様のお名前ってなんでしたっけ?』などと周囲の方々に聞けるわけがない。結局、『公爵様へ』とだけ書いて渡すことにした。

本日の公爵様はお休みの日。朝から部屋に籠もりっぱなしだ。

馬の被り物を装着し、お茶と手紙を手で書斎へ向かい、いつも通り扉を開けば、今日も公爵様を驚かせてしまう。声かけもノックもいらないと言われているから仕方ないが、どうにも自分が悪いことをしているように思えてならない。扉をゆっくり閉めて振り返ると、公爵様の姿はすでに見えなかった。しかし机の下で膝を抱えているのはわかってる。

私は公爵様の机にお茶を置き、そのまま床に膝をつく。

書斎の机は側面にも重厚な板がついており、四本の脚に支えられている。床と机の間にわずかな隙間があったので、そこへ手紙を差し込んだ。

「つまらないのですが」

もちろん返事はない。潜伏先である机の下で、カサリと手紙を手にした音が聞こえる。受け取ってくれたと喜んでいたら、ゴン! というすごい音が聞こえた。公爵様が机の天板で頭を打ったのかもしれない。

「だ、大丈夫ですか？」

だが、別に痛がるような声も聞こえてこないので大丈夫なのだろう。姿だけでも確認したほうがいいかと立ち上がったところ、足元に何かがあることに気が付く。再びしゃがみ込めば、そこには

私が差し出した手紙があった。

予想外の事態に戸惑うも、私は負けじと二回目の挿入を行う。

手紙はまたしても返ってきてしまった。この野郎、私の書いた手紙を受け取らないとは。

それから数回手紙の行つてらっしゃいとお帰りなさいを繰り返し、私はついに手紙を受け取つてもらうことを諦めたのだった。

私は腹を立てていた。公爵様の、他人を拒む徹底的な態度に。

厨房にやつてきた私は、火の中に手紙をぶち込もうと手を掲げたところで、何者かにその行為を阻まれた。

「やめなさい！」

振り返れば、女中頭が怖い顔でこちらを見ている。

私が手紙を一生懸命書いたことを知っていて、止めてくれたのだろうか。冷たそうな顔をしているが、実は優しい人なのかも……と思ったのに、違った。

「それは資源ゴミです。厨房の火で処分しないでください」

マリリン酷い。渾身の手紙をゴミだなんて。私は涙を零してしまう。

「何を泣いているのですか、いい年をして」

「だって、酷いことを言うから」

「何が酷いことですか！ ゴミの分別を守るのは人として当然のことです！」

「ゴミではありません！ これは、公爵様への思いを書き綴ったお手紙で」

「大旦那様に、お手紙を？」

「……へ？」

大旦那様とは公爵様のお父様。王弟でもある、尊いお方だ。その方がどうしたのかと聞き返すと、公爵様宛の手紙なら地方へ送らなければならないとマリリンは言う。

「地方？ どういう、ことでしょうか？」

「まさかあなた、旦那様が現公爵だと思っていたのですか？」

「え？」

「現在の公爵は、旦那様の父君であるアルゲオ様です」

あらまあ、なんという勘違い。

『公爵様へ』と書いてあったから、手紙を受け取ってくれなかったのか。そういえば最初に、旦那様のことは『局長』と呼べと言われたような気がする。

十年前、爵位は大旦那様のご子息が確かに継いだ。が、急にご子息の仕事が忙しくなったとかで、再び爵位は大旦那様に戻ったのだとか。

私は呆れ顔のマリリンにお礼を言つて、手紙を握り締める。

そして、走った。公爵様改め、局長のもとに。

遠慮なしに部屋の扉を開けると、局長は先ほど運んだ紅茶を口に含んだ瞬間だったようで、私の

登場に驚き思いつき噎せていた。

失礼しますと言って部屋に入り、扉をゆっくり閉めて振り返る。そこに局長の姿はなかった。すでに机の下に住人になっているに違いない。机の下からゲホゲホと咳き込む音が聞こえる。お勞しいものである。

私が「あの」と声を発すれば、音が途絶えた。話を聞いてくれるつもりらしい。けれど、一ヶ月間の経験から言って言葉が返ってこないことはわかりきっている。

なので私は、別の作戦に出た。

握り締めていた手紙をゴミ箱の中へ投げ捨て、代わりに捨ててあった比較的綺麗な紙を取り出し、あることを書き込んだ。

〈私の名前はユードラ・プリマロロです。局長のお世話係に任命されました。怪しい者ではありません〉

走り書きとなつてしまつたが、その文の記された紙をそつと机と床の隙間に差し込み、万年筆もコロコロと転がした。

神に祈るような気持ちで反応を待つ。これで駄目だったら、とは考えない。無視したら泣かせてやると、物騒なことを考えていた。

しかしながら、紙はあつさりと返つてきた。局長の返信付きで。

へはじまして、レグルス・ユースティティアと申します。

出会つて一ヶ月ちよつと経つていたが、やつとの思いで言葉を交わすことに成功した。それに加

えて、見たこともないほど綺麗な局長の字にも感動してしまう。そして、昂ぶつた感情はそのまま声となつて口から飛び出した。

「局長、私、嬉しいです！ まさか、反応をいただけるなんて！」

当然、返事はなかった。私一人だけ興奮状態で、机の下にいる局長は黙り込んだまま。

恥ずかしくなつたので、大人しくすることにした。

ガツガツしてはいけない。少しずつ、慣れていつてもらおう。

それに、これ以上休日の邪魔をしてはいけない。「何かご用がありましたら鐘を鳴らしてください」と言つて、私は部屋を出たのだつた。



私と局長の関係も一気に深まつた！ と言いたいところだが、あの日から数日たった今、あまり変わっていないというのが現状だ。職場に連れていつてくれる気配すらない。

とはいえ、さすがに「私も連れていけ！」とは言えない。どんな業種かもわからない職場だ。最悪、邪魔者にもなりかねない。

紙の上での地味な交流は続いていたが、交わされる言葉は他愛もないものばかり。相変わらずのんびりとした平和過ぎる日々が過ぎていく。

けれど、我慢も限界というもの。私は激しく暇を持て余していた。そこで、勇気を出して局長へ

手紙を出す。お話ししたいことがあります、と。

局長からの返事は、執事の手によって渡された。封筒の中に入っていたカードには、夕食のあとにでも、と丁寧な文字で綴られていた。

公爵家よりいただいた給料を使つて買ったカードの束と万年筆を持ち、馬の面を被ると、私は指定された時間に局長の書斎へ向かった。

扉を開けて部屋を見渡せば、無人に見える。恐らく、局長はすでに机の下にいるのだろう。随分準備のいいことで。

「ユードラです。夜分遅くに失礼します。突然の申し出を受けていただき、光栄に思います」

大切な言葉は、書面ではなく口頭で。これも父に習ったこと。

返事はないけれど、机の下から衣擦れのような音が聞こえたので本人がいることは確認できた。

私はさっそく机の前にしゃがみ込む。そしてスカートのポケットの中からカードを取り出した。

可愛らしい花柄のカードには、いくつかの質問を書いてきた。

まず「相談があります」と書かれたカードと万年筆を机と床の隙間に差し込むと、すぐさまへなんでしょうか?と書かれたカードが返ってきた。私は即座に、あらかじめ用意していたへもつと仕事をください」というカードを差し出して手番終了となる。

局長からの回答は「よく働いてくれます。これ以上、頑張ることもないでしょう」という事実上の戦力外通知だった。私は多大な打撃を受けてしまう。

だが、やられっぱなしの私ではない。持ち札はまだ豊富にある。

攻撃札へ暇でおかしくなつてしまいそうです。局長のお部屋の掃除だけでもさせていただきたいのですが」を差し出す。

せめて部屋の掃除や書物の整理などを許可してもらえたら、いくらでも時間が潰せる。けれど、返ってきた文章は否。それを許可してしまえば、局長の部屋を担当している使用人を解雇しなくてはならないと書かれていた。まったくその通りだ。考えなしに提案したことを謝罪すれば、気持ちだけ受け取ると返された。

——ぐぬう、局長め。なかなかやりおる。

最終手段として用意していたのは、へこのお仕事ですが、私にはきちんと勤め上げることができないようです。退職させていただきます」というもの。

給料をたくさんいただける仕事は素晴らしい。けれど、このまま暇を持て余した状態が続けば、私は怠惰の塊となつてしまう。自分らしく生きるには、ここでの暮らしは贅沢過ぎる。

躊躇いは一瞬だけで、先ほどと同じようにさつと机の下にカードを差し込んだ。

カサリと紙を掴むような音だけが聞こえる。局長がペンを走らせる音でも聞いて答えを予想しようかと机に耳を寄せた瞬間、ゴン！と頭を打つみたいな音が聞こえた。

至近距離にいたのでさすがの私も「うわ！」と声を出して驚いてしまった。すぐに「驚かせてしまい、申し訳ありませんでした」と書かれたカードが返ってくる。

なんてこった。私の一大決心を書き綴ったカードの裏面に、謝罪文を書いてくるとは——なんてことをしてくれる。

だが、こんなこともあろうかと、同じ内容のカードをもう一枚用意してきた。私は追い討ちをかけるかのごとく机の下へとそれを差し込む。

さっきまですぐさま返信をしていた局長だが、ここに来て動きが止まった。急^せかすようにコンコンと机を叩いたものの応答はなし。

「あの、新しい方が決まるまでここで働かせていただきますので、どうかそれまでに——」

こちらの言葉が言い終わらないうちに、ガタリと物音がする。ふと顔を上げれば、なんと局長が立ち上がっているではありませんか。

局長は視線をこちらに向け、しかし目が合うとすぐに逸^そらすという意味のわからない行動に出る。もしかして口頭で解雇を言い渡されるのではと、じつと局長の顔を見つめていたが、予想は外れることとなった。局長は一心不乱^{いっしんふらん}に筆を走らせ、顔を背けた状態で私にカードを差し出してくる。

そこに書かれていたのは、へ職場に行けば、仕事があります。私の秘書のような業務になります」というものだった。

「局長、本当ですか？」

私はその言葉に舞い上がり、局長のもとへ駆け寄ったが、ズザザッと素早い動きで回避されてしまう。話の詳細を聞きたいのに、局長は私が近づけば同じだけ離れていく。

しばらくそんな追いかけてをしていたが、埒^{うち}が明かないと思い、私は局長が机の下に入りやすいように椅子を引き、中に入るよう示した。局長はすぐさま机の下に住人となり、私もまた机の前にしゃがみ込む。

溜息^{ためいき}を吐きながら、このような状態で秘書なんか務まるはずもない、と先行きを不安に思った。

一緒に仕事をする前にしなくてはならないことがある。

私は真っ白なカードに走り書きをする。へ職場での仕事を始める前に、私たちはもう少し仲良くなる必要があります」と。

返事はすぐに返ってきた。

へふつつか者ですが、よろしく願います」

嫁入り前の娘か！ と、心の中で思いつき突っ込んでしまった。



局長と仲良くなければ、仕事にならない。最低限、普通に顔を合わせて会話をするくらい親密になりたいものだが、なかなか難しいものだ。

時間さえあると、私たちは向かい合って過ごしている。ただし、机を挟んでだが。

一度、庭を散策しようと提案して外に出たところ、ただの追いかけてことになってしまったのだ。

——駄目だ、こいつ。

これが、私の出した答えだった。

だからだと進まない関係のままでいるのは不毛である。さつさと本心を伝えて現状から脱出した。私は馬の被り物を身に着けて、局長のもとへ向かった。

「局長、やっぱり無理です」

さっそく私が降参宣言をすれば、〈そこをなんとか〉と書かれたカードがさっと机の下から出てくる。

〈面目ない〉〈どうにかしたいとは思っている〉と続け様に出てくるカード。だが、どのカードも攻撃力は低い。私の心には届かなかった。

私が怖いのかと訊ねると、〈そんなことはない〉というカードが返ってくる。だったらどうして心を開いてくれないのかと、責めるような口調で言ってしまった。

反応がないので、最後に別れの言葉を口にする。

「短い間でしたがお世話になりました。良い経験をさせていただき、感謝しております」

局長は見ていなかったが、私は机に向かって頭を下げる。そして踵を返した。

——さようなら、局長。

局長は人見知りが激しくて、酷く挙動不審だし、目が合ったら毎回涙目になるけれど、顔は史上最高水準の素敵さだったので目の保養でした。二度と、あなたのような男前には出会えないでしょう。

それから、使用人の皆さんは、突然やってきた私にとっても優しくかった。

そう、振り返ってみれば、公爵家の方々は本当に良くしてくれた。礼儀も何もなっていない、私みたいな給料泥棒に。気が短いばかりに恩を仇で返すことになってしまい、申し訳ないと思っている。

もう一度、感謝の気持ちを込めて頭を下げよう。そう思っ振り返ったところ、目の前に局長の姿があった。

気配なく近づいてきていたらしい。

悲鳴を上げて局長を驚かせてはいけないと思い、とっさに口元を手で覆う。なんの用だと問いかけたら、局長はカードを数枚手渡ししてきた。

書かれていた言葉は〈待ってください〉〈もう少しだけ時間をください〉〈ごめんなさい〉〈辞めないください〉の四つ。相変わらず綺麗な字だった。

しかし私は首を横に振って答える。

「このままお傍にすることはできません。私は、きつと酷い言葉をぶつけてしまうから」

私は局長との身分差も弁えない無作法者。そもそも、高貴な御方のお世話係や秘書など最初から務まるわけがなかったのだ。

局長はさらさらとカードに何かを書いて、すぐさま私に手渡ししてくる。

〈言葉は胸に突き刺さりましたが、否定はできません。私は人と話すことが苦手で、どうにか他人との接触を避けて生きていければと思っていました〉

これまでずっとかと聞けば、コクリと頷く。悲しい人だと呟いたところ、肩を落とすような素振りを見せた。そんな局長に、再び「ここでは働けません」と言う。しかし諦めない局長は、さらにカードに筆を走らせた。

〈人と話をしたくないし、目を合わせるのも苦手、長年そう思っていました〉が、ここ一ヶ月半で考

えが変わりつつあります」

それは一体どういう意味で？ と問いかけるが、または銅像のように動かなくなってしまう。

「あ、机の下に入っても大丈夫ですよ。どうせ暇ですし、お話なら聞きますから」

隠れてもいいとすめたが、局長はふるふると首を振って拒絶する。まだ頑張るつもりらしい。

局長は、時間をかけて一枚のカードいっぱい文字を書き綴った。そして、書き終えたカードを見つめたまま動かなくなったので、図々しいとは思ったが早くよこせと手を伸ばす。

凄（すこ）いことが書かれてあるのかと思いきや、そこにあったのは、なんてことのない、人として真（ま）当な感情だった。

局長は、私が挨拶（あいさつ）をしたり、帰りを待ち構えていたり、こうしてカードに言葉を書いて交流をはかろうとしたことが嬉しかったらしい。もう少しで私に慣れるかもしれない、とも書かれている。なんとなくではあるが、局長が言いたいことはわかった。だがしかし、わからないこともある。

「事情は、理解しました。けれど、どうして、そのように他人を恐れるのです？」

過去に何かあったのなら、同じような過（あやま）ちを繰り返さないためにも事情を聞いておかなければならぬ。しかしながら、返ってきた言葉は、私の想像の斜（かた）め上を行くものだった。

「私は、自分に自信がないのです。だから、他の人の前に出るのが恥（は）ずかしい」

「は、はあ!？」

理解不能な主張の前に、私は眩（めま）暈（まい）を覚えた。

「局長は何を言っているのでしょうか!? 自信がない!? あなたが!？」

毎日朝から晩まで頑張っている人のどこに、恥（は）ずかしい要素があるというのだろうか。公爵家という高貴な生まれで、容姿もこの上なく恵まれているというのに。まったく理解できない。意味不明だ。

「私は、局長ほど毎日一生懸命に働いている貴族を知りません。お屋敷に帰ってきてても夜遅くまで働いているというお話を、執事さんから聞いたことがあります」

局長は私の言葉に反論するかのよう、何かを書いてよこす。

「毎日あくせく働いているのは、私の能力が至らないだけです。父ならば、もっと効率良く仕事ができるでしょう。それに貴族とは、民の見本となるべき存在です。労働は義務と言えます」

カードの内容を読み、この、控（くわ）えめで慎（つつ）ましいお貴族様が！ と言いたくなるのをぐっと堪（こら）える。公爵家のような大貴族は、莫大な資産と領地を持っているので、何もしなくても不労収入が入ってくる。基本的に働かなくても生きていけるのだ。

王宮でも、出勤はしているのにだらだらと過（すご）し、遊んでいる貴族を何人も目の当たりにしてきた。

そう、貴族と言っても最（じ）上（じやう）等（とう）から最（き）下（げ）等（とう）まで。皆（みな）が志（こころ）高（たか）く生（い）きているわけではない。

局長は色々と変わっているけれど、どこまでも真面目で、貴族としての務めをまっとうしようとしている、稀（まれ）な人だ。そんな方の願いを無（む）下（げ）にするわけにはいかない、と考えを改める。

それに、このままではきつと寂（さび）しい人生を送ることになるのではないか。この先、他人と接することによって感じる楽しさや嬉（うれ）しさを知ってもらうためにも、協力すべきなのではと考えた。

「わかりました。もう少しだけ、局長のお傍で仕えさせていただきます」

どこまでも上から目線だと、我ながら呆れてしまう。

だがそんな失礼な態度の私に、局長は「へありがとうございます」と書かれた紙を差し出し、深く頭を下げてくれた。どうか頭を上げてくださいとお願ひしたことは、言うまでもない。

こうして、私はもう少しだけ公爵家でのお仕事を続けることになった。



まずは、私が同じ部屋にいても大丈夫だと思ってもらわなくては。

その日、私が馬の被り物を装着して周囲をウロウロする間、局長は椅子に座ったまま我慢していた。目をぎゅっと閉じて、膝の上で手を握りながら。かすかに震えているようにも見える。

——駄目だ、こいつ。

またしても作戦が失敗したので、マリリンに相談してみた。

「あの、少しよろしいでしょうか？」

「その珍妙な馬の被り物を脱いだら、聞きますが」

「あ、すみませんでした」

もはや自分の面の皮と思ってしまうほど慣れた馬の頭を取り外し、マリリンの隣に座る。

さて、今回の件はどういう風に説明すればいいのか。「ある男性が私に怯えてばかりで慣れてく

れない」などと言ったら、一発で局長のことだとバレてしまう。それは避けたい。

私が言葉に詰まっていると、マリリンは手にしていた本を読み始めてしまった。ちよつと待ってよお姉さんと言おうと思つたが、表紙に描かれていた犬の絵を見て名案が浮かぶ。

「——じ、実は、実家の犬が私にまったく懐かなくて！」

「それは残念でしたね。相性が悪かったのでしょうか。諦めてください」

「そんな！」

本日もしよっぱい反応を示してくれるマリリン。相変わらず、どんな状況でも冷静な女性である。

「私、仲良くなりたいんです！ 仲良くなって、その」

もつとお仕事が欲しい、とは言えない。なので、適当に誤魔化す。

「さ、散歩、そうです！ 散歩に行きたいんですよ！」

そう、散歩だ。一緒に散歩するくらいまで関係が近づけば、なんの問題もなく仕事ができるような気がする。

「犬の散歩なんて、首輪に紐を付けて、力任せに引っ張つたらいいのでは？」

「駄目です。とても、とても大きな犬で、逃げ足も速いので、私一人で捕まえることは不可能です」

「それは困りましたね」

「はい。なので、女中頭に相談しています」

マリリンは少し考え込むように首を傾けたあと、深い溜息を吐く。そして、私に一つの助言をく



れた。

「あなたが、偉そうに上から見下ろしているのが悪いのでは？」

「え、それは？」

「犬と同じ目線で、同じ気持ちになって、一度考えてみてはいかがでしょう」

犬……ではなく、局長と同じ目線で。

今まで考えもしなかったことだったので、戸惑ってしまう。

どこから見ても完璧な男性の、よくわからない悩みなど理解できるわけがない。けれど無理矢理、自分の場合に置き換えてみる。

——私は自分が恥ずかしい。他人に見られるのも苦手だ。他人の視線を受けるだけで萎縮してしまう。そんな中、新しくやってきた変わり者の従者が変な仮面を被ってこう言う。

『大丈夫ですよユードラお嬢様、私は仮面を被っていますから。ほうら、顔も見えないし、視線も感じないでしょう？』

『そういう問題じゃないわよ、わからない人ね。私は他人から見られるのが嫌だと言っているの！』そんなシーンを妄想しているうちに、答えはあっさりと出た。

相談に乗ってくれたマリリンにお礼を言い、私は休憩所を飛び出す。そして私室に戻り、あるものの製作に取りかかった。

そして翌日——

本日、局長はお休みの日となっている。私は朝から給仕^{おこな}を行い、紅茶を淹^いれたあとに少しだけ話

があると言って時間を作っていたのだ。

私は今日も馬の頭部を被っている。そのほうがいいと思ったからだ。そして、徹夜で作ったあるものを差し出す。

局長に贈ったのは、馬の被り物（黒）。局長の父君、公爵様の馬を模して作ったものだ。

「頑張って作りました。どうぞ、被ってください」

局長は驚いた表情で、私の顔——もとい馬面を見上げている。

何か言おうとしたのか、口を開いてパクパク動かしていたものの、言葉を発することはなかった。やはり、局長がいくら人見知りと言えど、私が馬の面を被るという対応は失礼だったのかもしれない。

けれど、今回は私が局長の気持ちになって考えた末の行動だ。ふざけて作ったものではない。視線を受けるのが苦手なら、局長自身も顔を隠せばいいと思ったのだ。

しかし、一介の使用人がご主人様にとんでもない贈り物をしてしまったような気もする。なんだから自分がみつともなくて俯いた。

ふと、視界の端に何かが映り込む。局長が私にカードを差し出していた。

なるべく局長の顔を見ないように受け取ったのだが、カードに書かれた言葉を読んだ次の瞬間、思わず顔を上げてしまった。

書かれてあったのはへ素敵な馬です。いただいてしまってもよろしいのでしょうか？というお褒めの言葉と謙虚な一言。

「あ、あの、どうぞ、それはお好きなように使ってください」

局長はへありがとうございますーと書いたカードをささと差し出し、馬の頭部を装着する。

そのあと何枚かカードを渡されたが、被り物は文字を書く時も特に問題がないようだ。

「息苦しくないですか？」と聞けば、局長は馬面でうんうん大丈夫と頷いている。

良かった、問題ないようだ。ひとまずこれで、見られることが恥ずかしいという問題はどうかなりそうだった。

それから数日。局長の頑張りもあって、私が部屋にいても机の下に隠れずに仕事ができるようになった。とても嬉しい。馬の被り物の効果は絶大だった。さすが、局長と公爵様の愛馬を模した被り物。

会話も、身振り手振りで済ませることが多くなった。もちろん、話しかけるのは私だけで、局長は動作で反応するのみ、という形ではあったが。

けれど、以前に比べたら随分と成長したものだろう。たとえば、部屋の中に馬の頭部を被った人間が二人もいるという異様な光景であっても。

「局長、今日はお散歩に行ってみませんか？ ほら、こんなに天気もいいことですし！」

窓の外に広がるのは、雲一つない澄んだ青空。それに今、公爵家のお庭には薔薇の花が咲き乱れている。素晴らしいお散歩日和というやつだ。

ちらりと局長のいる方向を見れば、がっちがちに固まった彼の姿。ぎゅつと手の平を握り締めて

いるので、緊張状態なのだろう。まだお散歩は早かったかと思い、残念な気持ちになる。

まあ、仕方のない話だ。互いに馬の姿となって、さほど時間も経っていない。今日のところは諦めることにしよう。

休憩時間にも庭の散策をして木陰でこっそり食べようと、昨晚作ったクッキー。そういえば、そろそろマリリンの休憩時間。彼女を誘って出かけるかと、今後の予定を立て直す。

そして依然として静止状態にある局長に、声をかけた。

「嫌だったらいいますよ」

その代わり休憩に行ってもいいかと聞こうとした瞬間、急に局長は動き出した。ふるふると首を横に振り続けるお馬さん。一体どういうことなのかと首を傾げたが、すぐに『散歩が嫌だ』ということへの否定だと気が付く。

「もしかして、一緒に散歩に行ってください、ということでしょうか？」

今度は首を縦に振り始めた。

「本当ですか？ 嬉しいです、ありがとうございます」

またしても首を振り始める局長。いつてことよと言いたいのだろう。

こうして私たちは、庭の散策に出かけることになった。大きな一歩だと言えよう。

一度部屋に戻り、籠の中にクッキーを入れてから局長の部屋へ向かう。

「さあ、行きましょうか」と言えば、ビクリと肩を揺らす馬——もとい局長。早く外へ行けるよう

に、わざと局長に急接近して追い立てる。すると作戦が功を奏し、迅速に庭まで移動することに成功した。

庭に出れば噓せ返るような薔薇の香り！……がすばいのに、馬の被り物をしているせいでいまいち香りがわからない。しかしながら、視界だけはばっちり。仕事をしやすいように視界を確保すべく改良を重ねていたのだ。

被り物は馬の首から上を作ったもので、鼻の穴から視界を確保できる構造となっている。よく見えない場合は、口を開けば問題解決。馬の目と人の目の位置はどうしても合わないのです、このような作りにした。そんな馬の頭部を被った状態で、局長と庭を散策する。

薔薇園は迷路のようになっており、さまざまな種類の花が咲き乱れていた。

「とても綺麗ですね、局長。あ、これ、凄く可愛い！」

レースをくるくると巻いたような真っ白い薔薇の花は、王宮のお庭でも見たことがない、珍しいものだった。香りを嗅いでみたくて、馬の口を開いて花に近づける。うん、いい香り！

さすがは公爵家のお庭。国内一の薔薇園があるという噂は本当だった。

心ゆくまで可憐な花を眺め、うっとりしたあとに気が付く。局長と一緒に来ていたのだった。それに、年甲斐もなくはいでしまった。とっても恥ずかしい。

恐るおそる振り返れば、局長はほどよい距離を取って立ち尽くしていた。

「す、すいません、つい、夢中になってしまっ

そんな私に、局長はカードを差し出す。一体何事かと思つて紙面に視線を落とした。

〈その薔薇の名前は『ブルジョン・ドウレーブ』。夢の蕾という意味で、異国よりもたらされた品種です〉

見た目も素敵なのに、名前まで可愛いなんて!!
それにしても、まさか名前を教えてもらえるとは思いませんでした。局長にお礼を言ってから先に進む。

驚いたことに、局長はたくさんさんの薔薇についての知識を持っていた。この薔薇の名前は何かと言うとか、名称にはこういう由来があるとか、色々な話をカードに書いて解説してくれる。

「局長は薔薇の花がお好きなんですか？」

そう訊ねると、今までさらさらと文章を書いていた指先がピタリと止まる。

「局長？」

何か聞いてはいけない事情でもあったのか。

局長の手がわずかに動いたので、書きかけのカードを覗き込む。

そこに書いてあったのは一言だけ。――妹が。

「妹？」

妹ということはフロース様？

「あの、局長」

再び問いかけた瞬間、局長は大袈裟なほどにビクツと驚いてみせる。やがて目の前にいるお馬さんはガタガタと震え出してしまった。

「あ、あの、ごめんなさい。私――」

両手を上げながら局長から距離を取り、危害は与えないことを主張する。

だがしかし、局長の震えは一向におさまらない。

「局長？」

不可解な様子の馬――もとい局長を訝しむように見ると、人差し指をこちらに向けてきた。

「私が、何か？」

局長は首を横に振った。私ではないと？

「だったら一体なんに怯えて……」

「何をしているのよ、あなたたち！」

突然の背後からの声。驚きで体がびよんと伸びてしまった。さらに、振り返ってからも驚く。

そこにいたのは――

「フ、フロース様!？」

私と局長の前に佇んでいたのは、公爵家の麗しの姫君フロース様だった。そのお姿は太陽の光の下でも美しい。世界の美の結晶を集めたかのような存在に、目が眩みそうになる。

フロース様は庶民風の服にエプロンを着け、バケツとはさみを手にしている。それはまるで庭師のよう――

「もう、見飽きたかしら？」

またしてもフロース様に見惚れてしまった。なんて失礼なことを、と思い頭を下げる。

一方のフロース様は、厳しい声で追及してきた。

「それで、一体あなたたちはなんなの？」

「……決して、怪しい者ではありません！」

「はあ？」

馬の頭部を被って公爵家の庭園をうろつく二人組。駄目だ、怪し過ぎて説得力がない。

どうしようかと振り返れば、局長は体を硬くした状態で立ち尽くしていた。あれは、緊張が最高潮に達した時の恰好だ。局長は、身内であるフロース様でさえ恐れているというのか。気の毒過ぎる。

とにかく今回は見逃してもらおうと思い、私はフロース様に懇願した。

「あ、あの、私たちは通りすがりの馬です！　どうか、お見逃しください！」

そう。私と局長など極めてつまらない存在で、フロース様みたいな偉大なるお方が気になさるのは時間の無駄である、と必死になって主張する。

「でも、怪しいわ」

「そうは言っても、どこにでもある普通の二人ですのよ」

しかし依然として、フロース様の「この不審者が!!」という厳しい視線は突き刺さったままだ。

「ねえ、お兄様がこんなわけのわからないことをしろと言ったのかしら？」

フロース様は立ちほだかる私を押しつけて、局長に接近する。っていうか、正体バレてた！

……いや、局長ほど背の高い人はお屋敷に二人としない。一目で誰かわかってしまっても仕方な

いのかもしれない。

慌てて局長を振り返れば、いつもより二倍速い動きで、どこか隠れる場所はないかと右往左往していた。そんなにもフロース様が怖いのか。慌てふためく馬の傍に駆け寄り、どうどうと立ち着くよう説得を試みる。

そんな中、局長を猛追するフロース様。すると局長は、思いもよらない行動に出た。

なんと、薔薇が咲き乱れる茂みの中へ突っ込んでいこうとしたのだ。

「だ、駄目です局長!!　そっちは茨の道!!　……違うか。なんだろう。あ、道なき道です!!」

局長の背中を掴んでぐいぐいと引っ張り、薔薇の棘だらけの草木に逃げ込もうとするのをなんとか食い止める。そして局長を宥め、その場に蹲らせることに成功した。

私たちの不審な行動を誤魔化すために、フロース様にお声をかける。

「フロース様はどこで何を？」

「見てわからないの？」

「えーっと」

エプロンにはさみ、バケツ。庭師のような恰好なので、もしかして薔薇のお世話をしているとか？

そう訊ねると、フロース様はこくりと頷いた。

「そうよ。あの薔薇も、そっちの薔薇も、私がお世話をしているの」

お姫様の趣味が薔薇の手入れだなんて意外だ。

「おかしいかしら？」

「いえ、とても素敵です」

ここに来るまでに見た薔薇の話をするれば、今まで険しい顔をしていたフロース様の表情が和らいだ。本当に薔薇の花が好きなのだろう。

「ここは、素晴らしい庭園です」

「そうかしら。まあ、すべてはお兄様のおかげなの」

フロース様のお話を聞いて驚愕する。なんとこちらのお姫様は薔薇の育成方法がわからないから教えてほしいと言いい、局長に勉強をするようにお願いしたらしい。

「お兄様のほうが勉強は得意だし、教えるのも上手なのよ」

「はあ、左様でございましたか」

薔薇の苗の近くで膝を抱きかかえている局長は、世界の絶望を背負い込んでいるかのような、悲愴で溢れていた。

自由奔放な妹と、言いなりになってしまいう兄。二人の関係をそれとなく察し、思わず同情した。

「邪魔してしまったわね」

「いえいえ、とんでもございません」

私と局長には無限に時間があるので問題ないと答える。

「そうだわ」

フロース様は薔薇の苗に近づき、茎にパチリとはさみを入れた。

「これを、あなたにあげるわ。お近づきのしるしに」

なんということだろうか！フロース様は、大切に育てた薔薇の花を私にくれると言う。手の平ほどの大輪で、一輪だけでも迫力がある深紅の薔薇だ。

「あ、ありがとうございます。嬉しいです！」

「そう。良かったわ」

私は馬の口を開けて香りを楽しむ。とてもいい匂いがした。

薔薇の花を握り締めたまま、深々と頭を下げる。籠の中に花を入れようとした時、クッキーを持ってきていたことに気付いた。

私は、立ち去ろうとするフロース様を引き止める。

「これ、よろしかったら」

「まあ、何かしら？」

下町の市場で買った材料で作った庶民クッキーです、とは言えない。とはいえ贈り物とは、渡した相手に喜んでもらいたいという気持ちが大事なのだ。中身は問題ではないと自分に言い聞かせつつ、二袋持っていたうちの二袋を差し出す。

フロース様はにつこり微笑みながら、お礼を言ってクッキーを受け取ってくれた。

「それでは、ごきげんよう」

「は、はい！」

私はすっかり局長の存在を忘れたまま、公爵家のお姫様の去りゆく姿をうつとりと眺めていた。